
一通の手紙

遠野 桜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一通の手紙

【Nコード】

N3633N

【作者名】

遠野 桜花

【あらすじ】

夏の終わり、不思議な出会いをする一人の少年。その向こうには。

何者かが階段を下りてくる。その足音にぞっとした。上には誰もいなかったはずなのに。

私は屋上の掃除をしたところだった。同じ当番の奴がサボったので、一人でやっていた。

私は屋上階段の踊り場で振り返った。

掃除を終えた屋上には自分しかいなかったはずだ。どうしてこんな悪日に怪談じみた経験をしなければならないのか。ふざけるな。上を睨みつける。すると、一人の少女が階段の中程で立ち止まった。この薄汚れたご時世で、いまだき珍しいほどの清純そうな雰囲気醸し出している。

髪が風に吹かれてそよぐ。年頃は私と同じぐらいだろうか。しかし、何故こんな所にいるのか、全く分からない。私は口を開いた。湧きあがる疑問を堪えて。

「誰だ？」

とりあえず上辺だけ取り繕った抑揚のない私の声がひどく虚ろに思えた。

「私は、涼野葉月と言います。貴方にこれを渡しに来ました」

その涼野と名乗った少女は、私のいる踊り場まで軽い足取りで下りてきた。声だけは僅かに怯えているようだが、それ以外はまるで無邪気な子供のような振る舞いだった。そして私に厚い封筒を渡した。

この中身が金なら、有り難く頂こう。そうでないのなら、ゴミ箱に放り込むだけだ。そう割り切って私は言った。

「この中身は？」

単刀直入に聞きたいことだけを聞いた。それ以外に用はない。彼女は睨みつける私の眼光を真っ直ぐ受け止めて言った。

「手紙です。貴方宛ての」

「なんだよ、それ。俺はあんたを知らない。そんな奴に手紙渡され

ても困るんだよ。俺みたいな出来損ないに」

そう吐き捨てた。そう言うと、涼野が駆け寄り、その勢いで私に抱き着いてきた。当然私は彼女を引きはがそうとする。しかし、彼女は離れない。それどころか、彼女は首筋に手を回し腕に力を込めてくる。

「おい、離せ」

「何故、自分でそう言うの？ 人によって見方は違うのに。自分のことを自分で否定しないで」

「何をしろと？」

「今は二つ」

涼野の身体の暖かみが、重みが私に伝わってくる。

「それを最後まで読んで。また私に会いにきて」

「何処にいればいい？」

「ここに」「……分かった。分かったから離してくれないか」

「うん」

涼野は少し身を引いて微笑んだ。少し間を置いて、

「ありがとう。受け取ってくれて」

そう言って少女は踵を返そうとした。

「ちょっと待ってくれ」

「何？」

「一体何者なんだ？」

涼野は振り向いて微笑んだだけだった。

「私からも一つ。貴方は一人じゃない。見守っている人は、貴方のすぐ傍にいるわ。本当に、すぐ傍に。だから、独りだと思わないで」

気がついたとき、私は手紙を持って立ちすくんでいた。

あの少女は何故あんな所に現れたのだろう。どうして私にこれを渡したのだろう。一体、何のために彼女は私に会ったのだろうか。

今も、それらのことはわからない。しかし、私の手元にその手紙はある。

少女の思い出と共に。

(後書き)

拙い文章ですが、読んで下さってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3633n/>

一通の手紙

2011年10月7日20時56分発行